

一塊のででむし動くああさうか

藤田湘子

昔、かたつむりを飼ったことがある。居ないと思えば葉の先端に移動して、行く手を捜しているかのように角を伸ばしていた。静かでゆつくりとした動きでありながら、独特のリズムのせいか、いつまでも見ていられた。

何かを見ていて、その情景が動いた瞬間に「ああそうか」と、何かに気付く一瞬がある。見るといふよりぼんやり眺めている時に気付くという感じ。湘子の「ああさうか」とは、何だったのか気になる所である。

掲句を見た時「夏鶯さうかさうかと聞いて遣る」と詠んだ飯島晴子のことを思い出した。同時期の作に「蝸牛と生れて奈良の竹垣に」「螢火忌けいくわと呼ばむか晴子逝きたる日」があるのを知り、その感をまた深くした。

2002年（H14作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京